

<原著>

スクール（学校）ソーシャルワーカーにおけるミクロ・メゾ・マクロレベルの活動に関する現状と課題 — スクールソーシャルワーカーの言説分析からの一考察

中田 喜一

Current status and problems on micro, Mezzo, macro level activities in school social workers
— A consideration from discourse analysis of school social workers.

Kiichi Nakata

This paper confirms the significance of major school social work (SSW) . Then we organize case studies of textual activities on key SSW and analyze SSWr 's discourse on the two perspectives on which school social workers (hereinafter SSWr) are located.

When SSWr is working at a school and at the macro・Mezzo・macro level, there are aspects of making students adapt to school culture and aspects of transformation to change the environment. In this thesis, I will discuss the current situation from activities on how SSWr is involved in the situation, and discuss the issues in carrying out ecological social work.

Key words : School social work, Micro level support, Macro level support, Mezzo level support, ecological view point

スクールソーシャルワーク, ミクロレベル支援, メゾレベル支援
マクロレベル支援, エコロジカルな視点

はじめに

本論は、主要なスクールソーシャルワーク（以下、SSW）に関する意義を確認する。そして主要なSSWに関するテキストにおける活動の事例検討を整理し、スクールソーシャルワーカー（以下、SSWr）が置かれる2つの視点についてSSWrの言説を分析する。

SSWrが学校で、ミクロ・メゾ・マクロレベルで活動するとき、そこには学生に対して学校文化への適応をさせるという側面と、環

境を変革させていく変革の側面があるという。本論は、それに対してSSWrがどのような立場で関わるのかを活動から現状を論じるとともにエコロジカルソーシャルワークを行う上での課題を明らかにする。

1、方法

まず、現在のSSWrの現状を整理する。そして、SSWrの実際の活動に関する言説を主要なテキストからミクロ、メゾ、マクロレベ

ルで抽出し、その課題を抽出する。

2、スクールソーシャルワークにおける 現状と課題—エコジカルな視点と学校

2008年に文部科学省はSSWr活用事業を実施した。予算金額は、当初の予算は1,538百万円であり、表1のように国は定めている。

表1 スクールソーシャルワーカー活用事業についての趣旨（文部科学省 スクールソーシャルワーカー活用事業より作成）

趣旨

いじめ、不登校、暴力行為、児童虐待など、児童生徒の問題行動等については、極めて憂慮すべき状況にあり、教育上の大きな課題である。こうした児童生徒の問題行動等の状況や背景には、児童生徒の心の問題とともに、家庭、友人関係、地域、学校等の児童生徒が置かれている環境の問題が複雑に絡み合っているものと考えられる。したがって、児童生徒が置かれている様々な環境に着目して働き掛けることができる人材や、学校内あるいは学校の枠を越えて、関係機関等との連携をより一層強化し、問題を抱える児童生徒の課題解決を図るためのコーディネーター的な存在が、教育現場において求められているところである。

このため、教育分野に関する知識に加えて、社会福祉等の専門的な知識や技術を有するスクールソーシャルワーカーを活用し、問題を抱えた児童生徒に対し、当該児童生徒が置かれた環境へ働き掛けたり、関係機関等とのネットワークを活用したりするなど、多様な支援方法を用いて、課題解決への対応を図っていくこととする。

なお、スクールソーシャルワーカーの資質や経験に違いが見られること、児童生徒が置かれている環境が複雑で多岐にわたることなどから、必要に応じて、スクールソーシャルワーカーに対し適切な援助ができるスーパーバイザーを配置する。

事業内容

(1) 指定地域数 141地域

(2) スクールソーシャルワーカーの職務内容等

教育と福祉の両面に関して、専門的な知識・技術を有するとともに、過去に教育や福祉の分野において、活動経験の実績等がある者

問題を抱える児童生徒が置かれた環境への働き掛け関係機関等とのネットワークの構築、連携・調整学校内におけるチーム体制の構築、支援保護者、教職員等に対する支援・相談・情報提供教職員等への研修活動 等

(3) 運営協議会の設置

指定団体は、地域の実情に応じた調査研究を効果的に実施するため、指定地域内において、教育委員会、学校、関係機関等を含む運営協議会を設置する。

2017年現在、日本のSSWは発足から9年ほど経過している。以下に詳述するが文部科学省の案では社会福祉士等になっていたが、実際は様々な専門家によって担われていた。また、理念としてもバラバラだったのが現在では、エコロジカルな視点のソーシャルワークの考えが浸透し、「チーム学校」としての支援の形式が出来てきた。

SSWガイドライン（試案による）SSWの導入の背景によると、学校において「不登校、いじめや暴力行為等問題行動、子どもの貧困、虐待等の背景には、児童生徒の心理的な課題とともに、家庭、友人関係、学校、地域など児童生徒の置かれている環境に課題がある事案も多い。その環境の課題は、様々な要因が複雑に絡み合い、特に学校だけでは問題の解決が困難なケースも多く、積極的に関係機関等連携して対応することが求められている¹⁾。

そこで、これまでSSWに求められてきたような人間尊重、ストレングス、エコロジカルな視点に立脚したような視点での活動が求められている²⁾。

たとえば、人間尊重とは、人権に基づいた関わりである。とりわけ、学校現場では教師から子どもへの人権の侵害はもちろん、子ども同士でもいじめといった人権侵害が起きている。このようなあり方はソーシャルワークの原理に反しているので子供たちの価値や尊厳の回復が必要になってくる。またストレングスも重要である。ストレングスは、その方の強みを引き出す支援技法である。SSWにおいても、問題を問題として捉えそれを解決するばかりではなく、直面している困難を通

して、子どもたちが人として成長することができるようにサポートするという姿勢を大切にしたい²⁾。

最後にエコロジカルな視点であるが、これは、ソーシャルワークが人と環境との相互作用の中に問題が起きているというように観察するという視点からもSSWにおいても家族、地域、国、世界といった集団と個人との関係性の中に問題が構築されていると考える。子どもにおいては、学校や親に立ち向かい一人だけで問題を解決していくことが難しいので、ソーシャルワーカーが子どものニーズに合致するように調整をしたりすることがある。また、子どもをエンパワメントして自己で解決していけるような課題や環境の不適合の状態であるならその折り合いの調整をしていくこともある²⁾。

現在、社会の課題としては多様化、個別化が後期近代といったグローバル化が進展している中で進行している。たとえば、我が国の子どもたち個人の課題としては、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることにについて弱い面があることや、自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識等が国際的に見て低いことなどが指摘されており、新しい時代の子供たちに必要な資質・能力を育むために、子どもの自信を育み能力を引き出すことが求められている。また、新たな価値を創造していくためには子供一人一人がお互いの異なる背景を尊重し、それぞれが多様な経験を重ねながら、様々な得意分野の能力を伸ばしていくことが求められている³⁾。

このような社会の背景の中で、チーム学校として個々の教員が個別的教育活動に取り組むのではなく、学校のマネジメントを強化し、組織として教育活動に取り組む体制を創り上げるとともに、必要な指導体制を整備することが求められている³⁾。その上で専門スタッ

フとしてスクールカウンセラーやSSW及び養護教諭にチームとして課題の解決に求められる専門性が必要とされている。

SSWrとは、福祉の専門家として問題を抱える児童生徒等が置かれた環境への働きかけや関係機関等とのネットワークの構築、連携、調整、学校内におけるチーム体制の構築・支援などの役割を果たしている³⁾。

現状のSSWの課題は、大多数の都道府県、市町村、学校が「勤務日数が限られており、柔軟な対応がしにくい」、「財政事情により配置等の拡充が難しい」、「人材の確保が難しい」をあげている。またSSW自体は教員免許でもなれるが、福祉の資格を有するソーシャルワーカーの方が、「ケース会議において、把握されていない子どもの背景が伝わるように意識する」「ケース会議において、関係者と学校が協働して支援するプランニングを行う」などの項目において、有意に行っていたと言われている⁴⁾。

また、専門性に基づくチーム体制の構築において、地域との連携体制の整備や、家庭教育支援チーム等による、家庭教育に困難を抱えた家庭に対する幅広い相談対応等の訪問型家庭教育支援を推進する。2019年に訪問型家庭教育支援を行う家庭教育支援チーム数等(283チーム)を増加させることを予定している⁵⁾。

このように、グローバル化して個性化・多様化する生徒のニーズに対応していくにはこれまでのように教師だけのみならずチーム学校として福祉職、心理職、養護教諭などと連携し、チームとして地域と連携しつつ支援していく必要があるだろう。また、国はSSWを1万人雇うとしており、SSWは2013年度、1008人が学校等に配置されている。専門職としては、社会福祉士は440人、精神保健福祉士は249人である⁶⁾。現状では、まだ1万人

に到底足りておらず、人員の増員は今後の課題であろう。以下、SSWにおける教育課題についてSSWが置かれた現状を踏まえて記述する。

3、スクールソーシャルワーカー養成の専門教育における教育課題について

ソーシャルワーカーには置かれている環境上、ジレンマが出てくる。たとえば、生徒同士のいじめや、保護者の虐待ならば介入という形で家庭訪問なり調査なりを葛藤なく実施出来る。しかしながら、これが学校現場で起きた体罰や過剰指導、セクシャルハラスメント、いじめの隠蔽行為など教師や学校組織からの人権侵害の場合、調査や介入が難しいケースがある。何故ならば、教育者側が子供に対して人権侵害をしたケースにおいては、SSWの雇用主体が教育委員会であるので、学校や教師を養護する立場からの関与を要請される可能性がある²⁾。

それゆえに、SSWrも雇用先の教育委員会と生徒の当事者視点の間でジレンマの状態に陥ることが想定される。またSSWrの価値としても人間尊重や人権の理念としてあるがゆえに、理念に忠実なSSWrほどよりジレンマの状態に陥ることになるだろう。実際このようなことは、SSWrではなくとも、ソーシャルワーカーの教科書などにも施設と社会福祉士の倫理などの項目で頻出の課題ではある。

しかし、学校の場合は特にそれが顕著に表れる。たとえば、山下はスクールカウンセラーとの違いによりそれを説明している。スクールカウンセラーでは子供の心の解決が主眼となっており、学校組織の管理の中に制約をされているという。SSWrは、そこから自由である必要があるという。彼によれば、ソーシャルワークの人材育成は対処しやすい個人の問題に執着し、解決しやすい人を対象

にする傾向にあり、環境に対しての働きかけが弱いという⁷⁾。SSWrが学校で、自由であるためにはどうしたらいいだろうか。山下(2008)⁷⁾は以下のように述べている。

現場で活動するSSWrは葛藤を強いられる場面に遭遇することになるわけであるが、そのときに自らの活動の基盤や枠組みがどこに由来しているかという点に立ち返る必要がある。SWが社会的弱者の置かれている状況に関与し、社会的正義を実現するための実行者であるという原点を鑑みるならば、SSWrはまず弱者である子どもの側に焦点を当て、そこからすべての実践を展開していくべきであろう⁷⁾。

山下は、ここで専門職は当事者の側に焦点をあて、そして、枠組みの由来に立ち返るべきだとする。しかし、それは～であるべきという価値の問題であり実際にどのような方法やジレンマ解消の戦略を持ってSSWrが現実に対して適応しているのかを全く論じてはいない。本論は、そのSSWrの現実適応に対しての動機の語彙を探る。

また、実態としてもSSWの学校におけるチーム学校というメゾレベルの支援は、福祉現場における多職種連携と明確に違う方向性がある。具体的にいえば、学校という中で、教員と一緒に生徒指導をしなければならないケースである。このような環境では福祉の側も「指導」という言葉に違和感を覚えるであろうし、教育の側も「相談援助」という言葉に違和感を覚えるのではないだろうか。つまり、ジレンマ的な環境が予めSSWrの現場には組み込まれているのである。

4、SSWrの語りによる学校文化とSSW

上述したように、山下(2016)²⁾などによってジレンマの存在がSSWでは知られているが、それぞれの領域ごとにどのようにその解

消戦略があるのだろうか。まず、マイクロ、メゾ、マクロはどのような支援領域のことを指すのか概観する。マイクロレベルとは、親と子ども、教師と子ども、単独の場面であり、メゾとは、複数の場面などであり、マクロとは、子どもと直接相互作用するわけではないが、子どもに関わる人々に影響を与える領域だ。たとえば、親が子供に経済的に困難を抱え、子どもを育てる余裕がなくなり虐待を引き起こしたりするケースである⁸⁾。

エコロジカルなソーシャルワークとは、子どもと環境との相互作用の分析をするものであるが、その際、連携の中のアクターとしてエコマップによるマイクロ、メゾ、マクロといった各レイヤーごとの明確化、循環円フィードバックが重要になるだろう⁸⁾。

実際にSSWrは学校で仕事をしている中で他機関、他職種とどのように連携するのだろうか。SSWrのHさんは以下のように述べている。

学校の中に教員とは異なる視点や姿勢で子どもたちの困難を支えていく人間が必要であること。しかし一方で、学校とは異なる視点や姿勢で子どもたちの困難を支えていく人間が必要であること。学校のありようそのものが、もっと子どもたちの今を支える存在、ニーズに合うものにしていく必要性も感じている～中略～カウンセラーなどにしても、既存の学校制度やそのありようを見直さないまま、子どもたちの「適応」ばかりを結局は促すものでしかないなら、かえってさらに子どもたちをソフトに追い詰めていくことになるのではないか⁹⁾。

Hさんは、カウンセラーの接し方とSSWrのコミュニケーション形式を明確に違うことを明確化しつつ単に学校側の職員としてのSSWrではなく、既存の学校制度といったメゾレベルや個別の学生といったマイクロレベル

の支援の必要性を述べている。つまり、現場への適応戦略としてカウンセラーの別のSSWrのAさんは、メゾレベルにおける関係機関の連携の難しさについて以下のように述べている。

それまでその職種がなくてSSWrなどの新しい職種が入っていくと、いったい何ができる存在であるかを様子見されたり、まして近い活動をしているところからは、余計者として排除されがちです。ある時、子ども家庭相談機関の責任者から、SSWrがすることを決めてほしいと言われました。この責任者は、“住み分け”という言葉をよく使う人でした。子ども家庭相談機関がおこなう支援とSSWrがおこなう支援を、はっきり分けたいようでした¹⁰⁾。

Aさんも、Hさんと同様に学校内といったメゾレベルにおいてカウンセラーや教員と連携する形で支援をする時SSWrが異端視として取り扱われることに危機感を抱いている。またHさんはキーパーソンになる教員の意識改革も生徒を理解することと同様に重要だと指摘している。学校では、教員、カウンセラー、生徒指導、就職指導など担当が決まっており一定の職務に基づいて仕事が行われているが、これらの縦割りの形式合理的コミュニケーションでは、エコロジカルソーシャルワークとして生徒を支援するのは困難を極める。このことは、Bさんも指摘している。Bさんは、ある学校に初めてSSWrとして配置された日に、校長に表2のように問われたという。

この校長の言葉には、あらかじめSSWrに与えられた職務権限が明確であるという暗黙の前提が含まれている。しかし、SSWにおけるエコロジカルな視点というのは環境に介入し調整することが仕事である。現状では教育職員と福祉専門職とのお互いの職種理解

が上手くいっていない典型的な事例だといえる。また、「チーム学校」としての機能も校長の認識を変えるようにミクロレベルな働きかけをしていかなければならないことも今後の課題だろう。

表2 学校長とSSWrとの会話（門田 2009 p.168）

校 長：ところで、SSWrにはどんな権限があるのですか？
SSWr：この学校には、不登校や非行などの問題を抱える生徒がたくさんいます。正直、教師だけで対応できる限界を超えています。そのような問題を解決していくには、それなりの力として権限や権力をもたなければ、今の生徒たちを指導することができない。しかし、われわれ教師にはそれがないのです。そんな学校現場でSSWrにどんなことができますか？
校 長：今日、初めて来た人にいろいろ言っても仕方がない。お互い手探りでやっていきましょう。

おわりに

日本において、SSWrが学校現場に導入開始されて9年経過した。SSWrの実践事例がテキストや事例集などを通して実践事例が徐々に世に出てきている途上である。エコロジカルな視点もSSWにも導入されいよいよ学校、家庭、生徒、地域などの連携が構築されつつある。

しかしながら、課題としてSSWrのエコロジカルな視点を徹底が出来ていないように思われる。エコロジカルな視点とは、SSWr自身のジレンマも含めてエコロジカルな視点である。学校、地域、子ども、SSWr 4つのファクターを含めてメゾレベルの実践を俯瞰的に観察する必要がある。また、今後もミクロ・メゾ・マクロレベルの成功・失敗例を我々研究者及び現場のSSWrで連携を取りつつ発

表していかなければならない。それにより反省的实践者としてのSSWrとして学校だけ、子供だけの問題とせず全てのレベルで課題を抽出し社会全体のマクロな問題としてクレームを申し立てを行う必要があるだろう。

本論で明らかに出来なかったこととして、現状の実践課題に関する類型化やその対処法を記述出来なかった。今後の課題としたい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省：児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～，教育相談等に関する調査研究協力者会議，(http://www.pref.shimane.lg.jp/izumo_kyoiku/index.data/jidouseitonokyousoukousoudannjyuuujitu.pdf) 2017年1月，40－41，2017年9月13日閲覧
- 2) 山下英三郎：子どもにえらばれるためのスクールソーシャルワーク，学苑社，2016，16－23
- 3) 文部科学省：チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申），中央教育審議会，(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf) 2015年12月21日，4－10，2017年9月13日閲覧
- 4) 山野則子：エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク，明石書店，2015，23－34
- 5) 厚生労働省：すべての子どもの安心と希望の実現プロジェクト，子どもの貧困対策会議，(<http://www.mhlw.go.jp/topics/2016/01/dl/tp0115-1-05-09d.pdf>) 2015年12月21日，9－10，2017年9月13日閲覧

- 6) 福祉新聞：SSW を常勤配置に 社会福祉士会などが要望，2014年10月6日
- 7) 山下英三郎・内田宏明・半羽利美佳：スクールソーシャルワーク論——歴史・理論・実践，学苑社，2008，13-14
- 8) 山野則子・野田正人・半羽利美佳：よくわかるスクールソーシャルワーク第2版，ミネルヴァ書房，2016，4-100
- 9) 山下英三郎：スクールソーシャルワークの展開——20人の活動報告，学苑社，2005 22-23
- 10) 大田なぎさ：スクールソーシャルワークの現場から——子どもの貧困に立ち向かう，明治図書出版，2015，149-150

ていける社会の実現を目指して，(<http://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/pdf/taikou.pdf>) 2014年8月29日，2017年9月13日閲覧

文部科学省：スクールソーシャルワーカー活用事業，2008年(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/046/shiryo/attach/1376332.htm) 2017年9月13日閲覧

【参考文献】

- 大西良：精神保健福祉士のためのスクールソーシャルワーク入門——子どもと出会い、寄り添い共に歩むプロセスを見つめて，へるす出版，2012
- 米川和雄：スクールソーシャルワーク実習・演習テキスト，北大路書房，2010
- 門田光司・奥村賢一：スクールソーシャルワーカーのしごと，中央法規，2009
- 門田光司・奥村賢一：スクールソーシャルワーカー実践事例集，中央法規，2014
- 門田光司：学校ソーシャルワーク入門，2002，中央法規
- 全米ソーシャルワーカー協会編：スクールソーシャルワークとは何か，山下英三郎監訳，現代書館，1998
- 山下英三郎：子どもにえらばれるためのスクールソーシャルワーク，学苑社，2016
- 門田光司・奥村賢一：スクールソーシャルワーカー実践事例集，中央法規，2014
- 内閣府：子供の貧困対策に関する大綱～ 全ての子どもたちが夢と希望を持って成長し

